
狂撃隊の生活日常

i z u m i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂撃隊の生活日常

【Nコード】

N8395X

【作者名】

izumi

【あらすじ】

これは僕が書いている「私たちの学園生活日常」のスピンオフ作品です。この作品に出てくる狂撃隊の日常を書いたものです。狂撃隊の日常とは一体どんなものなのか、ちょっと裏側を覗いてみましょう。（注：「私たちの学園生活日常」にまだ登場してないキャラも出てきます。と言いかまわります。）

日常1（前書き）

涼平「おー俺たちの小説かー。」

椎名「でもメインが逃走中だから結構な遅さですよ？」

涼平「マジかー...。」

漣「にしてもオッドアイ多いわね。」

椎名「本当だね。」

涼平「そのこと何だが作者がオッドアイ系が好きだから、自分のオリキャラにもその設定をつけているんだってさ。」

スバル「マジか...。」

日常1

狂撃隊、それは社会に見捨てられた者、行き場を失った者、仲間に裏切られた者などが集まった集団である。

いつもは探し事や依頼などを受けている所でもある。狂撃隊に所属する人数はざっと80人。

此処は、その狂撃隊達が生活を送る屯所。此処では、その狂撃隊の日常を覗いていこう。

？「あゝ…今日も暇だなゝ。」

この男の名は秋神涼平。あきがけりょうへい 狂撃隊創造者にして局長を務める男だ。

涼平「あゝ…こんな日は信童とかとゲームしたいんだけどなあゝ…」

いつもは自分の部屋でのんびりと過ごしている。

涼平「暇だなあゝ…。」

？「いつも暇じゃないんですか局長。」

そう秋神に話しかけて来たのはスバル・アキラ。この狂撃隊の副隊長であり転生者である。

涼平「おゝスバルか。何だ？」

スバル「いや、最近なんか鈍^{なま}っているような気がして…ちょっと運動でもして体をほぐしたいんですけど…」

涼平「お前の運動は普通の人に取ったら死に直面するぞ。」

スバル「あゝ…そうですね…。」

涼平「なんかそこらへんの不良でも殴つとけ。」

スバル「へい。」

そう言うとスバルはどこかに行き、後から男たちの悲鳴が聞こえて来た。

スバル「さゝてと…依頼は来てるかなあ…。」

？「局長、誰か来てますよ？」

？「あれ友達ですか？」

涼平に二人の女性が話しかけて来た。髪が金髪のオッドアイのこの少女は雷文寺椎名^{らいもんじ しいな}。電気を操る少女である。

そして、髪が茶髪でオッドアイのこの女性の名は初音涼萌^{はつね りほ}。常にかのりの大きさの筆ペンを所持している。

ちなみに何でこんな名前かと言うと自分の名前の涼と萌をくっつけてそれぞれを音読みした時の一番最初の文字をくっつけた名前であ

る。

涼平「何だ雷文寺、初音。」

椎名「屯所の入り口になんか長髪の男性が立っているんですけど。」

涼萌「んで「誰かー、いますかー。」ってずっと言ってるんですよ。」

涼平「あー多分間違っているんだろう。案内してやれ。」

椎名「はい。」

涼萌「メンドー。」

涼平「ふう…今日も平和だなあ…。」

ちなみに長髪の男性はその後、警察の方に連れて行かれました。

日常1（後書き）

えー最初でも言った通り逃走中がメインです。

なので更新はかなり遅いと思います。

でもそれでもこいつらの生活を見てくれるなら幸いです。

日常2（前書き）

涼平「あれ？2話目？」

椎名「見てくれてる人たちがいて、うれしかったから第2話目を投稿するらしいんだって。」

スバル「あー見てくれてる人たちがいるのか…うれしいなあ。」

椎名「でもなんだか逆に恥ずかしかったり…。」

涼平「ほんとだなー。」

椎名「では、はじまりまーす。」

日常2

森

椎名「よっ！はっ！」

今、雷文寺は此処で特訓をしている。何の特訓かと言つとカッコいいポーズを取る特訓である。

涼萌「もうちょっと手を挙げた方がカッコいいと思うんだけど…。」
んでそのポーズを初音に見てもらっている。

椎名「こう？」

涼萌「おーよくなつたねー。いいよー。」

椎名「ふう…今日は此処までにするか…。」

二人が帰ろうとすると…。

？「椎名ー、涼萌ー。どこにいるのー？」

誰かが二人を呼ぶ声が聞こえて来た。

椎名「あ、この声は…。」

涼萌「おーい、智さーん。」

この女性の名は灼西智^{しやくせいち}。涼萌はさん付けで呼んでいるが歳は涼萌の方が上である。

涼萌「ん？なんか失礼なことを言われた気が…。」

智「あーいたいたー！今日あなたたちに仕事が入ってるって連絡があつたわよ。」

涼萌「へーそうなんですかー。」

椎名「んじゃ早く行こっか。」

涼萌「うん。」

？「ちょ…姉ちゃん…そろそろ…その腕離してくれない？」

智「ダメよ！絶対に努を離したりはしない！だって私は努のことが大好きだからー？」

？「離せブラコンバカ！！」

今智に襟元をつかまれている男子の名は灼西努^{しやくせいと}。智の弟で、智はこの弟に溺愛している。

努「俺だって自由に生活してえのに何でいっつも縛られなきゃならないんだよ！」

智「それはね…努にけがとかしてほしくないから…。」

涼萌「えーと…とある場所に行つてどんな所か調べるんだって。」

椎名「なんじゃそりゃ。で、どこ?」

涼萌「えーと…。」

とある工場

涼萌「此処か…。」

椎名「なんか不気味だね…。」

?「早く仕事済ませて帰りましょう。」

?「そうですね…結構不気味ですし…。」

今は4人いる。そのうちの二人はさっきの雷文寺と初音だ。そして一人は容姿が某ゲームの半人半霊の人に似ている燭冥魄神しよくめいはくしんと言う難しい名前の人。ちなみに白い魂は無い。普通の人である。何回も言う、某亡霊のことは知らない。

そして、もう一人はなんだか容姿が某アニメの天使に似ている篝かがり・シードリアと言う人。背中は何故か羽があつて空も飛べる。

涼萌「じゃあ入りますか。」

椎名「うわ…気持ち悪…。」

篝「趣味が悪いですね。」

燭冥「何だこのパイプみたいなのは？気持ちが悪いっいたらありやしない。」

涼萌「しかもなんか入ってるし。」

篝「これはキノコ？」

椎名「に顔と手足が生えた？」

篝「…ん？これ、どこかのゲームで見たような…。」

涼萌「気のせいっしょー。」

燭冥「あとでサムルやシードに聞いてみるか？あの人造生命体コンピに。」

涼萌「そうだね、聞いてみようか。メンドーだけど。」

篝「…！おい、これ人じゃないか？」

涼萌「え？」

燭冥「まさかそんな…。」

見てみると確かに人である。

涼萌「人だ…。」

燭冥「おい…ここから先はほとんど人じゃないか？」

篝「そのようですね。」

椎名「でも、何のために…。」

篝「…！誰か来ましたよ！」

椎名「隠れよ！」

？「なあ…ほんとにこんなことするのか？」

？「当たり前だろ。」

？「人造生命たちを戦闘人にして此処を制圧するための武器にする
つて。」

4人「！…！」

？「まあ、こいつらなんかいなくてもできるとは思っけだな。」

？「そうだよな。」

篝「おい…。」

？・？「！？誰だ！？」

篝「その話…じっくり聞かせてもらおうか…。」

涼萌「手加減はしないよー？」

燭冥「私の手にかかればあなたたちは簡単に地獄の門をくぐれますが？」

椎名「久しぶりに…暴れられるね…。」

篝「椎名、決してこいつ等（パイプに入っている奴ら）に危害は加えるなよ。」

椎名「分かってる。」

？「ちょ、侵入者だ「死ね。」ぐわあああ！！！！！！」

バタッ

？「ひ、ひい…。」

燭冥「安心しろ、死なない程度に攻撃してある。」

涼萌「じゃあ…やる？」

椎名「やろうか…。」

篝「やりましょう。」

？「ひゃ、やめ…。」

.....

あしこら遅したー

「そ、よね……」

「寄っ迫してゐんしやないかしら？」

涼平「あーそれが」

日常3（前書き）

涼平「今回やっと本編にも出ているトS巫女が出ます。」

椎名「ではどござー。」

日常3

椎名「あー…いい物買った。」

？「本当よね。」

この二人は今、街に来ている。

そのうちの一人は雷文寺椎名。もう一人は轟^{とどろ}漣^みと言い、狂撃隊のメンバーからはDS巫女というあだ名が付けられている。ちなみに雷文寺とは息のあったコンビである。

雷文寺が買ったのは主にカメラや衣装。意外とアニメキャラのコスプレが趣味である。ちなみにコスプレをさすのも趣味である。

そして、轟が買ったのは人を痛めつけるために買った鞭や、これを食べた人の苦しむ顔が見たいと言う理由で買ったハバネロや、縛って動けなくする縄や、人の恥ずかしい秘密を書きとどめるノートやペンなどDSらしい物を買っている。

漣「次はどこに行きましょうか。」

椎名「えっと…此处が良いな。」

漣「じゃあ行きましょうか。」

椎名「うん。」

スバル「ポーカーモーン言えるかなー？」

？「何歌っているんですか…。」

スバル「聞いて分からないか？新バージョンの言えるかなだよ。」

？「歌詞全然違いますから！あとそれ以上歌うのやめて！この小説消される！抹消される！永遠の闇に投獄される！！」

スバル「大丈夫だろー少しぐらい。」

？「全然大丈夫じゃねええええ！！！！！！」

今突っ込んだのはシード・ポルノグス。髪が植物になっている人造生命体だ。

スバル「なんか知らんけど世間ではいろいろ騒がしいな。」

シード「まあたしかにいろいろありますからね…。」

と、そこに…。

？「あれ？何してんの？」

スバル「あ、クルス。」

前からやってきたのはクルス・パトリア。涼萌の名字の女性の姿から髪を下したような姿をしている。そして、大のゲーム、アニメ好きでもある。

スバル「今日の収穫はどうだった？」

クルス「うん！よかったよ！お目当てのものも手に入ったし！！」

スバル「そうかそうか。」

クルス「じゃあ先に帰ってるから！」

スバル「おー、気をつけて帰れよー。」

？「あらあら、こんな所にいたんですか。」

？「お呼びつすよー。」

？「何してんのよ…。」

人込みから3人の女性が出て来た。

一人はサムル・ニヤール。頭に猫の耳が生えている人造生命体。もちろん耳はつけ物ではない、実際に生えている。そして、尻尾もある。

もう一人は左目に眼帯をしているプレミア。彼女の周りは常に肌寒く、氷系の技が使える。ちなみに眼帯をしている理由は左目は何かも紋章的なものだかららしい。（ちなみに雷文寺にもあります。右手の甲にあります。）ちなみに紋章的なものはしっかりと目の機能はある。

そして、最後は某人気アニメの主人公にそっくりな小萌こもえずか。性

格は某キャラとは違い、その某キャラの友達であるツインの双子の姉にそっくりなツンデレである。（クルス曰くツンデレ最高らしい。）クルスとはある意味良い仲。

スバル「及びだつて？誰に？」

プレミア「局長っすよー。」

すずか「なんか友達が来ているから来いだつて。」

スバル「ふーん…んじゃ行くか…。」

シード「帰るの？」

スバル「あつたりまえだろ。出て来い！！」

ポン！！

スバル「じゃ、なんかあつたら報告な。」

プレミア「分かりましたー。」

涼萌「絵を書くのは楽しいな。」

屯所では初音が絵を書いていました。

日常4（前書き）

スバル「レギュラーっていつそろっのかな…？」

プレミア「さあ。」

日常4

商店街

現在狂撃隊のうちの何人かは商店街にいる。理由はなんか暇なので近くの商店街を見に行こうってことになったのだ。

涼萌「なんか適当な説明が流れたような気がしたけど。」

涼平「それは奇遇だな。実は俺も思ってたのだ。」

椎名「私もです。」

？「わたしもー！」

？「…。」？金髪の子を見つめて鼻血を垂らしている。

知らない人がいるので説明しよう。

一人は某人気アニメの黒髪の子にそっくりな秋神涼。あきかみ涼平の妹だ。

もう一人の鼻血を垂らしている人は秋神涼音。あきかみ すずね涼平の姉だ。
ちなみに姿はシ〇〇ムにそっくりである。

涼音「あはは…なんかもうこのまま逝ってもいい気がする…。」

涼平「お姉ちゃんーん！！もうちょっと生きて！！なるべく生きて！！！！」

涼「どうしたのお姉ちゃん…。」

パアアア…。

涼音「ブハア！！」？鼻血が思いっきり出た。

涼平「お姉ちゃんああああああああん！！！！！！！！！！」

涼「ええええええええええ！！！！！！！！！！」

スバル「ギャグじゃん。」

涼萌「そこ突っ込んだらアカンよ。」

漣「あんなー私はこんなグダグダ漫才を見に来たんじゃないのよ。もっとチャキツとした漫才見せてーな。」

椎名「何故エセ関西弁！？」

シード「そして漫才じゃないよ。」

プレミア「ってかこのメンバー多すぎない？なんか周りから結構見られてる気がするんだけど…。」

サムル「気のせいですよー。」

スバル「絶対に多分じゃないぞ。」

智「努ぐ逃がさないわよ……。」

努「うわあああああ!!!!!!!!!!!!!!」

?「みんな……待って……。」

このからだの弱そうな女の子は卓星美海^{たくほし みみ}。体が弱く、基本的には車いす移動だが、今回は歩いて行くと自分で言い張ったのだが案の定の結果になった。

スバル「しょーがねーな……。」

そして、スバルが美海を背中に背負った。

美海「あ、ありがと……。」

?「だから無理するなって言っただのに……。」

この子は海風姫花^{うみかぜ ひめか}。涼平もよくわからないらしいが自分のことを人魚と言い張っている。多分とある作品の羽○○小鳩と同じと言っている。(涼平談)

姫花「だーからー本当なんだってば!!」

椎名「な、何に向かって言ってるの?」

?「そんな馬鹿はほつといて楽しもうじゃないか雷文寺。」

んでこいつはアリシヤア・K・K・フロールスキー。(アリシヤア・

カマンベール・カムイ・フロールスキー）見た目は普通の子だが
実は吸血鬼で現在1000歳以上らしい。ちなみに吸血鬼の苦手と
されるにんにくや日光、十字架は平気である。

アリシヤア「なんかこいつって言われた気がしたんだが…気のせい
か？」

プレミア「あと何か名前少し変えられてるしね。（アリシアだった
所がアリシヤアになってるし。）」

篝「ほんとですね。卓星も。知美^{さとし}だった所が美海^{みみ}になってますから
ね。」

アリシヤア「？」

美海「何のこと…？」

スバル「おらおら、ボーっとしてるとけがすんぞ。」

アリシヤア「うるさい。」

スバル「何だと？」

アリシヤア「うるさいんだよこの無駄脂肪！！」

スバル「ああ！？自分にないからってやつあたりってか！？無い物
ねだりか！？」

プレミア「ちょ、ケンカはよくないよー…。」

アリシャア・スバル「うるさい！！！」

プレミア「うわっ！！」

涼平「どうどうー」。

アリシャア・スバル「馬か！！！！！！」

涼平「仲良くー」。

アリシャア・スバル「ふん！！」

テレツテレレレ…。

アリシャア・スバル「マ○オか！！！！」

篝「長谷川さんですか？」

アリシャア「違うわ！！」

スバル「何でここで○魂！？」

その後、いろいろ楽しみました…。

皆「」「」「飛ばすなああああああああああああ
あああああああああああ！！！！！！！！」

「」「」

日常4（後書き）

次回、狂撃隊メンバー確認。

皆「???」

狂撃隊メンバー（前書き）

サブタイトル通りです。

でも結構????で埋め尽くされています。

（メインメンバーには名前の後にメインとつけておきます。）

狂撃隊メンバー

狂撃隊メンバー

? 1 秋神涼平 メイン

? 2 秋神涼 メイン

? 3 秋神涼音 メイン

? 4 ? ? ?

? 5 ? ? ?

? 6 ? ? ?

?
1
4

?
?
?

?
1
3

?
?
?

?
1
2
初音涼萌
メイン

?
1
1

?
?
?

?
1
0

?
?
?

?
9

?
?
?

?
8

?
?
?

?
7

?
?
?

?	?	?	?	?	?	?
2	2	1	1	1	1	1
1	0	9	8	7	6	5
?	?	?	?	?	?	?
?	?	?	?	?	?	?
?	?	?	?	?	?	?

?
2
9

?
2
8

?
2
7

?
2
6

?
2
5

?
2
4

?
2
3

?
2
2

?
?
?

?
?
?

?
?
?

?
?
?

?
?
?

卓
星
美
海

?
?
?

?
?
?

メ
イ
ン

?	?	?	?	?	?	?
3	3	3	3	3	3	3
6	5	4	3	2	1	0
?	ア	?	?	?	?	?
?	リ	?	?	?	?	?
?	シャ	?	?	?	?	?
	ア					
	・					
	K					
	・					
	K					
	・					
	フ					
	ロ					
	ー					
	ル					
	ス					
	キ					
	ー					
	メ					
	イ					
	ン					

? 4 4
雷文寺椎名
メイン

? 4 3
?
?
?

? 4 2
?
?
?

? 4 1
?
?
?

? 4 0
?
?
?

? 3 9
?
?
?

? 3 8
?
?
?

? 3 7
?
?
?

? 5 1
プレミア
メイン

? 5 0
?
?
?

? 4 9
?
?
?

? 4 8
?
?
?

? 4 7
?
?
?

? 4 6
?
?
?

? 4 5
轟
零
メイン

? 5 9
篝・シードリア メイン

? 5 8
小萌すずか メイン

? 5 7
クルス・パートリア メイン

? 5 6
スバル・アキラ メイン

? 5 5
? ? ?

? 5 4
? ? ?

? 5 3
? ? ?

? 5 2
? ? ?

? 6 6
海風姫花
メイン

? 6 5
?
??
?

? 6 4
?
??
?

? 6 3
?
??
?

? 6 2
サムル・ニヤール
メイン

? 6 1
シード・ポルノグス
メイン

? 6 0
?
??
?

?
7
4

?
?
?

?
7
3

?
?
?

?
7
2
燭冥魄神
メイン

?
7
1

?
?
?

?
7
0

?
?
?

?
6
9
灼西智
メイン

?
6
8
灼西努
メイン

?
6
7

?
?
?

スバル「多すぎないか…？」

狂撃隊メンバー（後書き）

次回は普通の日常に戻ります。

日常5（前書き）

何故か平日に更新。

土曜参観のせいで代休になったのだ。

日常5

屯所

スバル「えーお前らー。今から勉強を始める。」

椎名「しっかりと聞くんですよ。」

漣「先生はスバル副隊長、んで補佐は私たち第一課隊長の雷文寺隊長と私、第二課隊長の漣隊長が務めさせていただきます。」

涼萌「えー…メンドー…。」

スバル「そこ。殺られたくないならしっかりと聞け。」

涼萌「はい。聞かせていただきます。」

プレミア「（脅しじゃん…。）」「

スバル「今回はコンビ二前にいる不良たちの対処法について勉強を始める。」

姫花「不良ですか…確かに怖くて近づきたくないんですね。」

クルス「絡まれた時の面倒さと言ったら…。」

スバル「その時に役立つことを今から教えてやるっ。」

みんな「わーい!!」

スバル「まずもし不良がいたら…視線を合わせずに無視をするのが一番だ。」

美海「なるほど…。」

スバル「で、もし絡まれたら…。」

プレミア「絡まれたら?」

スバル「まずは無視。そこで殴りかかってきたら相手の拳を避け、腹に一発パンチ、んで股に足蹴り一本したら後は好きに殺れるぞ。」

美海「途中から殴りかかっているんですけど!」

スバル「大人数で攻めてきたら技を使って払いのけるのが一番だ。」

クルス「それ魔力を使った技を使える人しか無理ですよね!?ってかスバル副隊長や椎名隊長とか轟隊長とかアリシヤアとかこいつ(プレミア)とか篝とかにしか無理ですよね!」

プレミア「今こいつって言ったよね?今言ったよね!?タコ殴りに合わせてやるのか!」

スバル「そんなことは無い。普通の人でもジ〇ス〇ウェ〇を複数個使えばOK。」

クルス「普通の人を持っていませんけど!」

椎名「道具店の佐藤さんに頼めばもらえますよ。」

涼萌「誰だよ!？」

澪「私なら力の強い人にしか興味無いからあんなくそ共は眼中にないわ。」

椎名「黙りなさい戦闘狂。」

スバル「と、言うわけで勉強は此処まで。しっかり復讐しろよ。」

クルス「できませんけど!?!あと復習の字が違いますけど!?!」

プレミア「…ぐちゃぐちゃ…。」

日常5（後書き）

滅茶苦茶になりました。

次回もめちゃくちやに？

スバル「ちゃんと書け！！」
」

狂撃隊の仕組み（前書き）

狂撃隊の関係とかどうなっているか書いていなかった。

と、言うわけで今回書きます。

狂撃隊の仕組み

狂撃隊の仕組み

狂撃隊の管理責任者 局長 秋神涼平

隊長をまとめる副隊長 副隊長 スバル・アキラ

その下は五つの課に分けられており、その一つ一つの課をまとめるのが第〇課隊長

ちなみに第五課は二人いる

第一課隊長 雷文寺椎名

第二課隊長 轟漣

第三課隊長 アリシヤア・K・K・フロールスキー

第四課隊長 燭冥魄神

第五課隊長 秋神涼音 篝・シードリア

あとはそれぞれに所属する隊士

判明しているキャラで所属しているキャラ

第一課所属 初音涼萌 卓星美海 クルス・パトリア 小萌すず
か 海風姫花

第二課所属 プレミア シード・ポルノグス

第三課所属 秋神涼

第四課所属 灼西努 灼西智

第五課所属 サムル・ニヤール

こんな感じになっています

狂撃隊の仕組み（後書き）

スバル「次回は普通の日常らしい。」

能力・技（前書き）

涼萌「今回は日常じゃないよー。」

能力・技

涼萌「所でさー。狂撃隊の皆がどんな能力を持っているかどんな技を使うか知りたい？え？知りたくないって？そんなこと言わずに見て行こうよ。まずは局長からだよ。」

秋神涼平

能力

『幻覚・幻聴を相手に見せる能力』

技

無し

涼萌「局長は能力だけなんだよねー。まああれ無茶苦茶やばいんだけど実際には…次はスバル副隊長だよ。」

スバル・アキラ

能力

無し

技

静寂の鼓動…手から魔力のビームを打ち出す技。

雷電の怒り…両手から電気を放電させる技。相手をしびれさせて動けなくする。

精神の破壊…目があつた相手の精神を破壊させる。破壊された相手は一ヶ月間元に戻らない。

破滅の呪文…相手に向かって何かを唱える技。数秒たつと唱えられた相手の周りが大爆発する。

涼萌「怖っ！えーと続いては私です。」

初音涼萌

能力

『どこでも絵を書ける能力』

『絵を実体化させる能力』

技

完全コピー…相手の技を完全に再現できる技。

涼萌「どう私？能力が2つもあるんだよ！すごいでしょ！？続いてはプレミアムです。」

プレミアム

能力

『冷気・氷を操る能力』

技

冷波…冷気の波を打ち出す技。当たった所は凍る。

絶対零度…相手を一瞬で凍らす技。

冷凍地獄…相手を凍らす技だがこの技の氷は1000度の炎でも溶けないし、かなりの頑丈さを誇る。しかもかなり冷たい。四か月後経てば溶ける。

涼萌「うわ…絶対に凍らせられたくない…あと能力がチ○ノと似

ているのはあんまり言わないで：次は雷文寺椎名隊長です。」

雷文寺椎名

能力

『電気を操る能力』

技

電気の弾丸：電気の塊を打ち出す技。使う魔力が小さいので連続で打ち出すことが可能。

雷：空から雷を落とす技。しかも相手を追跡する。

雷電鳥：体に電気を運び、ものすごい速さで移動する技。

涼萌「名前からわかるとおり、電気関係の技が多いです。次はドS巫女です。」

轟漣

能力

『式神を呼び出す能力』

技

不明

涼萌「技不明って…何でだろうね…次はチートの噂がある篝さんです。」

篝・シードリア

能力

『相手の能力・技を完全に把握する能力』

技

自身向上…自分の能力などを上昇させる技。身体能力も格段に上がる。

魔力流出…相手の魔力を自分のものにする技。

炎の疾風…炎をまとった風を起こす技。

スケルトンウォール…見えない壁を作る技。かなりの強度。

受け流し…相手の攻撃を受け流す攻撃。ただし複数の技を受け流すのは不可能。

酸素欠乏…相手の周りの酸素を無くす技。

涼萌「技多いな…。最後はアリシャアです。」

アリシャア・K・K・フロールスキー

能力

『空中を飛べる能力』

『吸血鬼にした相手を操る能力』

技

紅真の光線…紅色の光線を出す技。当たると石化する。

魅惑の眼…目があつた相手を自分の思うがままにできる技。

ポイズン液…口から毒を含んだ液を飛ばす技。かなりの猛毒。

ブラッドローズトルネード…紅真の薔薇の花びらが舞う竜巻を起こす技。この技を使ったあとは辺り一面が血に染まる。

涼萌「以上で終了です。次回からは本当に戻りますのでー。」

能力・技（後書き）

スバル「俺もうちよつとあるぞ。」

アリシヤア「私もだ。」

プレミア「私もありますよ?」

涼萌「そうなの!?」

日常6（前書き）

見てくれる人が少ない。一回一日0ってこともあった。（実話）

スバル「当たり前だろ。」

プレミア「これ二次創作なのに、アニメとかゲームのが出ていない
ってことが…。」

よし、アニメなどの名前書こう！！

スバル「そうゆう見解？」

日常6

どこかの工場

涼平「『不良をなんとかしてください』という依頼が来たのでその工場に4人で来ました。」

スバル「今回は思いっきり暴れていいんだな？」

涼平「工場を壊さない程度でね。」

スバル「よっしゃあああ！！！！！」

プレミア「はいはいあほなこと行っていないで行きますよー。」

涼萌「はい。」

スバル「ちょ、待てよおい！！！」

工場内部

スバル「あー…こりゃー多いな…。」

涼平「多いな。」

不良1「あ？何だデメエら？」

涼平「今すぐ此処たちのいてくれないかな？」

不良2「はーはっは！ー！立ち退くわけねえだろバカがあー！！」

スバル「ほー…んじややるしかないな…。」

不良3「やるつてのか？」

不良1「おいテメエら！やっちまえー！！」

不良たち「おらああああー！！！！！！」

スバル「来たぞ…。」

涼平「こんぐらい何ってことないさ。」

不良「おらあー！！」

涼平「殴りかかるならちゃんと考えて殴った方が良いよ？ほら。」

ガッ

不良「な、受け止めただとおー？」

涼平「ほらよ。」

ドゴオオオ！！

不良「ぎゃああああー！！！！」

不良「女なんて関係ねえ！！」

スバル「女……？お前言ったな……。」

不良「は？」

スバル「俺は男だああああああ！！！！！！！！死ねええええええええええ！！！！！！！！」

ドガアアアアアン!!!!!!!!!!!!!!

不良「ぐはああああああああああ……！！！！！！！！！！」

アリシャア「あゝ…もう先にやってるな…。」

椎名「ま、楽しもうよ。」

「そうだな。」

「精氣不味そうなやつらばっかだね。」

アリシャア「行くぞ、雷文寺椎名、藤曇神士、ミント・ローズ!!」

椎名「はい！！」

神士「おう！」

ミント「久しぶりにやっちゃんおうか」

なんか新しいメンバーが出て来たので紹介。一人は藤曇神士^{とつどんしんじ}。顔が女顔で髪もロングにしているので（頭にクセ毛が一本）女と間違われやすいが、実際は男である。能力は『影を操る能力』。

もう一人はミント・ローズ。言っていることから分かるとおり、サキュバスである。性別は女で外見は高校生ぐらいの背丈で髪は腰まで届いているロング。能力は『魔力を吸い取る能力』。

神士「俺ついであつぱいことを言われたような気が…。」

ミント「私もよ。」

椎名「気のせいだよ。」

スバル「はっ!!」

ドゴオオオ!!!!!!

不良「ギャアアア!!!!!!」

プレミア「凍れ!『冷波』!」

ピキイイイン!!

不良「ちょ、凍ったああ!!!!!!」

涼萌「ダイナマイトを実体化」

日常6（後書き）

日常7に続く。

日常7（前書き）

また新キャラが出ます。

日常7

スバル「あー…今日も平和だなー…。」

椎名「そうですねー…。」

ちゅどおおおん！！！！！！

スバル「…またあいつらか…。」

二人が向かった部屋は、煙がもくもくと出ていた。

スバル「おーい、何してんだー？綺羅星ー？」

？「げほっ…ごほっ…ついに…ついに完成したわ…。」

？「やったね…げほっ…お姉ちゃん…ごほっ…。」

この見た目がそっくりな二人は綺羅星初きろせい とうと綺羅星純きろせい じゅん。二人は姉妹の関係で初の方が姉である。

二人は狂撃隊屯所の実験室でいつも薬を作っている。そして、薬の効果は絶大である。（まあすべて気持ち悪い色をしているが…。）

能力は二人とも無い。

スバル「また薬を作ったのかよ…で、今回は何を作っていたんだ？」

初「ふふふ…聞いて驚かないですよ…これ！」

スバル「……？いつものように気持ち悪い色をしているが……？」

初「実はこれはね……『幽体離脱ができる薬』なのだよ!!」

スバル「へえー……幽体離脱ね！……つてえええええええええ！！！！」

「……………」

いつもは『風邪が治る薬』とか『痛みを和らげる薬』を作っている
のでこういう薬を作ったことはかなりの驚きのようである。

初「この薬を飲むと一休から一定時間魂が抜けだして、自由に動けるようになるのだー!」

椎名「それってすごくないですか！？ノー！オルもんじゃないですか！？」

純「で、魂の体で他の人の体に取り憑いたりすることもできるのだ
――！！」

初「ま、実際には取り憑くじゃなくて体の中に入り込むって言う表現が正しいけどね。」

スバル「……ってか何でこの薬を作ってたんだ？」

初「うん、なんか男の人に頼まれて作ってたんだ。」

[illegible]

椎名「その人変態ですよ！？渡したら大事件につながりますって！！！」

初「あ、そーか。んじゃ此処に保管して、その人に無理でしたって伝えとくから。」

スバル「うん！それがいいね！」

その後、無理だったと伝えました。

スバル「しかしここにあると危険だな……どこかの世界の人にも送
つとくか？」

日常7（後書き）

またまた騒がしく…。

日常8（前書き）

今回の話は途中から路線から脱線します。

日常8

どこかの森

スバル「えー今からー強化合宿を行う。」

椎名「しっかりついてくるんですよー。」

篝「遊ぶのは無しだからな？」

プレミア「で、何でここ何ですか？」

篝「森の中は自然の訓練場だ。いつでも修行ができる。」

涼萌「えーやだよー…。」

涼平「ちなみに夜は近くのホテルで休むからなー。あ、そうそう…。」

涼平以外「？」

涼平「あそこ幽霊が出るって噂があるんだよなー…304号室に女の子の双子の幽霊が出てくるって噂が…。」

スバル「きよ、局長…？脅かすのはいい加減にしてくださいよ…？」

プレミア「そそそそんなのいいいいいるわけないじゃないですか…。」

篝「プレミア…動揺しすぎだ…。」

涼平「んじゃ、そうゆうわけで、頑張ってね。」

全員「…。」

スバル「…はっ！」

どかああああん！！！！！！

スバル「ふーっ…よし、これで108個目だな…。」

涼萌「ミ〇ル〇の体重とかと一緒にですね。」

スバル「今言うことじゃないだろ。」

篝「はっ！よっ！」

椎名「…スンゲー…。滝に切れ目が入ってる…。」

篝「それでも本気だしてませんか？」

椎名「マジかよ！」

やっぱりチートじゃねえの？

アリシャア「…あ…もうすぐ夜だ…私の活動時間だ」

ミント「んじゃ、そこらへんで遊ぶ？」

アリシャア「よし、行こう！！」

ホテル

燭冥「いい所ですねー。」

涼萌「うわー。」

涼平「な？」

スバル「んじゃ、部屋分けしてあるから…それぞれ分かれて！」

全員「はい！！！」

深夜

クルス「うーん…今何時だろう？」

スバル「今か…深夜1時だ。」

プレミア「此処は確か…!!」

ガクガクガクガク…。

スバル「どうした?」

プレミア「あの…此処…304号室何ですけど…。」

スバル「え?」

クルス「ちょ、んじゃ…幽霊…。」

スバル「んんんなもん嘘だつて!だったらあいつがいるだろ!!
昼間撮った写真で証明できるし!」

クルス「そ、そうか!!」

スバル「お、おい…舞善寺…。」

?「はい、何でしょうか?」

壁をすり抜けて来たのは舞善寺^{まいぜんじ}幽子^{ゆうこ}。死んだ人、つまり幽霊である。

スバル「お前…幽霊探知機とかできるか?」

幽子「何そのダウジングマシンみたいな名前のやつ!?…いや、気配はしま「ガサッ」…何してんですか?」

スバル「いや、ちょっと…タイムマシンを探して…。」

日常8（後書き）

次回、誰が出る？

日常9（前書き）

前回出て来たあれが出ます。

漣「何で女の子が僕って言うてるの？」

「いや、僕男なんですけど……昔っから女顔のせいで女の子って間違われているんですけどね。」

椎名「で、どうすんの？」

スバル「いや、さっきな、人形二つ頼んでおいた。こいつ等の器代わりになると思う。」

椎名「そうすか…。」

ピンポーン

スバル「お、来た来た。」

送られてきたのは2体の女性の人形だった。

スバル「じゃ、どうぞ。」

「待てええええええい！！！！！！！！！」

炎

スバル「どうした？」

「何で女性の人形だけなんだよ！！どっちか男性のいいだろ！！何で女性だけなんだよ！！」

スバル「いや、頼んだんだけどな、男性の方が無くてな、仕方なく

雲雀「まあまあ、かわいいからいいじゃん。」

炎「かわいい言っなああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

ノリのいいユーレイと照れ屋な幽霊が仲間になりました。

日常9（後書き）

日常10へ続く。

スバル「まだまだオリキャラ出るなこりゃ…。」

日常10（前書き）

久しぶりの更新だー！！

で、今回はクリスマスに向けてのネタ。

まだ早いですがどうぞ！

日常10

スバル「おい、そろそろあれの準備しないか？」

椎名「何ですか、あれって…。」

スバル「決まっているだろ、クリスマスのツリーだよ。」

漣「あーもうそんな時期なのねー。」

スバル「早いところ買っておいた方がいいと思うんだ。」

椎名「そうですねーじゃあ行きましょうか。」

雲雀「何々〽買い物〽？ 私たちも行くよー！」

炎「じゃあ…僕も…。」

デパート

スバル「もう出ているぜ…。」

椎名「じゃあ分かれて探しましょうか。」

雲雀「何がいいかな〜あつ！これがいいかな？」

炎「それ…リ〇ク…ってかゲームを探しに来たんじゃないんだけど…。」

雲雀「ホタテ屋？」

炎「二〇動かよ!!」

雲雀「そして俺撃墜！」

炎「もうええわ!!」

スバル「このレースなんかいいんじゃないか？」

椎名「いいんじゃないんですか？あとその綿とか…。」

スバル「そうだな…買っておくか…。」

スバル「お前らーなんかあったか？」

雲雀「いいのー？無いよー。」

スバル「ゲーム探していると大体は予想できたが…こうなったか…まあなんか買ってあげてもいいか。何が欲しい？」

雲雀「あ、今はいいや。」

スバル「え、何でだ？」

雲雀「サンタさんから…ほしいからそれまで我慢する。」

スバル「そうか…分かった。それまでな。」

雲雀「うん！」

スバル「あつ…。」

炎「雪…。」

椎名「見たことはあるんだ。」

雲雀「うん…いつも私たち二人だけでしか見てなかったけど…お姉ちゃんたちみたいに優しい人と一緒に見るのは初めてなんだ…。」

スバル「そうか…じゃあ手つないで帰ろうか。」

雲雀「…うん！」

スバル「お前の手暖かいな。」

雲雀「お姉ちゃんもだよ。」

炎「…。(ドキドキ)」

椎名「ほら、顔こっちに向けて。」

幸せな…クリスマスになりますように…。

日常10（後書き）

スバル「1週間ぶりだな。」

そうですね。

日常11（前書き）

シリアスっぽい？

スバル「今回シリアス物か？」

それはこの小説を読んでから。

日常11

はあ…はあ…はあ…。

私は今、光り輝く月夜の中を逃げている。

私は逃げなければならない。

私は生きるために逃げなければならない。

？「…。」

タッタッタツ…。

女性「はあ…はあ…!!」

追いかけてくる…どれだけ走っても追いかけてくる…。

嫌だ…死にたくない…!

？「…。」

女性「はあ…!!」

？「見つけた。」

見つけた…追いつかれた…でも…諦めるわけにはいかないんだ…!

？「往生際が悪いな、君何したかわかってんの？」

女性「あ、あれは仕方なくやったのよ！あいつが…あいつが…。」

？「でも…人を殺すことは…悪いことだよね？」

女性「うつ…。」

？「そんな君には…永遠の眠りと永遠の苦しみを…！」

バアアアアン！！！！！！

そこらあたりに血が飛び散った…。

女性を殺したそいつは返り血を浴びて、嬉しそうに笑っていた…。

カンカン！

スバル「はい！カット！！この調子で次も頼みますね！」

え？何してるかって？なんかみんなでドラマを撮ることになったんだよ。

しかも専用スタジオ使ってる（笑）。

涼平「あゝ…疲れた…。」

プレミア「局長演技すごかったですね〜。」

涼平「そうか？プレミアもよかったぞ〜。」

プレミア「いえいえ…。」

椎名「はい、休憩入ります。」

智「はい、お水です。」

涼平「お、サンキュー。」

智「どうぞ。」

プレミア「ありがとう。」

漣「次あちらのスタジオで撮りまーす。」

涼平「はい。」

神土「おい、この小道具ちよつとかけてるぞ。」

ミント「え？…あー本当ですね。誰か新しいの持ってきてくれませんかー？」

サムル「わかりました。」

シード「これどうする？」

アリシャア「それは…置いておいてくれ。」

シード「はい。」

努「本番始まりまーす。」

プレミア「あ、はじめますよ。」

涼平「よし、もう一回頑張ってくるか！」

日常11（後書き）

つーわけでドラマ撮影でした。

つか何で専用スタジオ持ってるんだよ。

日常12（前書き）

秋なので。（もう11月だろ。）

前にクリスマスのネタがあつた事は無視してください。

日常12

山

涼平「おい、今回はこの山の中で自由行動だ。この山には秋の味覚がたくさんあるから取って食ってもいいぞ。ただ毒キノコには気をつけろよな。」

全員「はい。」

涼平「じゃ、自由行動！」

スバル「おー栗だー。」

椎名「たくさんありますねー。」

プレミア「自然のものっていいですね。」

ミント「？大きい岩がある…。」

アリシヤア「うゝむ…こりや飛び越えていくしかないな…。」

その時…。

？「せーの…。」

岩の向こうから声が聞こえて来た。

アリシャア「?この声って…。」

バカアアアアン!!!!!!

岩が粉々に碎け散った。

アリシャア「うわあああああああ!!!!!!」

ミント「わあああああああ!!!!!!」

?「ふゝ…壊せたゝ…?何してんですかアリシャアさん?」

アリシャア「おい鍵宮!いきなり壊してんじゃないよ!!!!」

ミント「ビビったゝ…。」

鍵宮「すいませゝん。」

また新しいのが出て来たので紹介。こいつは鍵宮^{かぎみや}愛夢^{あいむ}。手の力がハ
ンパなく強い奴である。あと少し腐女子でDMで携帯を手放せない
性格であり、今も携帯を離さず持っている。

鍵宮「いやゝちょっと邪魔だったもんで。」

アリシャア「だからって壊すことは無いだろ!」

鍵宮「あ、今のツ〇ッ〇ーに…。」

アリシヤア「殺したるかああああ!!!!!!!!(怒)」

燭冥「これは…キノコか？」

？「ちよつと調べますね…あ、これ毒キノコです。」

燭冥「そうか。済まないな。」

？「べ、別にあんたのために調べてあげたわけじゃないんだからね
！」

もう一人、出て来たので紹介。この少女はチャーム。喋っているこ
とからして多分いい奴。

チャーム「多分って何よ!!！」

篝「…はあ!!！」

ズシヤアアアアン!!!!!!!!!!!!

努「すげー…。」

すずか「滝が割れた…。」

篝「よし、この鮭を持っていこう。」

二人「（滝のことは無視！？）」

漣「この柿もいいんじゃない？」

智「でも渋柿かもしれませんよ？」

漣「いいわよ。苦しむ顔を見れるんなら…。」（黒笑）

智「（うわ〜ドスだ〜…。」

涼平「よしみんな集まったか？それで料理するからな。」

全員「はい。」

その後、おいしく頂きました。

日常12（後書き）

チャーム「私が出て来たわね。」

鍵宮「私も名前変えて出て来たね。」

チャーム「そりや変えなきゃダメでしょ…。」

鍵宮「そうだよね。」

日常13（前書き）

今日ショッピングモール行きまーす。

日常13

スバル「今日ショッピングモール行ってみるか？」

全員「「賛成！！！」」」

スバル「おお…さすがはショッピングモール、広いなあ…。」

涼平「はい、じゃあここから自由行動、当たり前だが迷惑かけるなよ。」

全員「はい。」

涼平「じゃ、かいさーん。」

椎名「ねえ、この服どう？」

漣「うん、私はこっちがいい。」

チャーム「あれ？副長は？」

智「多分フィギュアかゲーセン。」

チャーム「あ、そう。」

スバル「うおおおおお！！！！！！」

涼平「あたたたた！！！！！！」

美海「局長は違う奴の掛け声でしょ！！」

スバル「おりゃああああ！！！！！！！！」

涼平「\$ @ + 〒全 ……………！！（何と言っているのか理解不能）」

美海「局長なんて言ってるの！？」

燭冥「何してるの？」

篝「太鼓の達人で燎原ノ舞とペドレー2000の2曲を合わせた得点がどちらが高いか競ってる。」

燭冥「どっちも 10じゃん！！！！」

スバル「あー…疲れた…。」

涼平「腕死んだ。（笑）」

燭冥「で、どっちが勝ったの？」

スバル「えーと…240万3000と240万3200…って微妙

な差で局長が勝っている!!」

燭冥「つーか2曲ともフルコンボかいあんたら!!」

篝「すごいですね。」

アリシヤア「いろんな食べ物の店があるわね。」

ミント「何か買っていく?」

アリシヤア「気になるし…買おうか。」

ミント「いえい!!」

愛夢「これもいいな〜あ!これもかわいいな〜。」

涼「可愛い小物がいっぱいですね〜。」

涼音「これをあーしてこれをあーしたら…。」

涼「お、お姉ちゃん…なんかあやしい人になってるよ…。」

姫花「動物さんたちだ〜。」

シード「あー！チワワだー！」

姫花「どれも飼えませんか？」

シード「えええええ！！！！！」

なんかいろいろ遊んで帰りました。

日常13（後書き）

日常14に続く。

日常14（前書き）

狂撃隊のメンバー全員出すの無理だな。

日常14

涼平「あゝ…今日も平和だゝ…。」

ミント「よっと!」

涼平「あ、ミント。何しに行っていたんだ?」

ミント「ちょっと精気を吸いに、ね」

涼平「へ、へえー…。」

アリシャア「お前また行っていたのか?やめろって言うていただろう。」

そう言うアリシャアの服が赤く染まっていた。

ミント「あなたも人のこと言えないわよ。東〇のフ〇ンなの?」

アリシャア「別にいいだろう。」

ミント「良くないわよ!」

涼平「あははー…。」

椎名「よっ!はっ!」

プレミア「あなたいつも訓練しているね。」

椎名「当然でしょ?」

涼萌「いつもキレイがいいですね。」

プレミア「次は何するんすか?」

椎名「電気のパワーを溜めて一気にあそこの不良に放出!」

二人「へー…。」

椎名「行くよ…はあ…。」

ビビビビビ…。

涼萌「うおわ…。」

プレミア「わわわ…。」

椎名「はあ————!!!!!!」

ビビビビビビ…!!!!!!

不良「あゝ授業かったりい…。」

バリバリバリ!!!!!!

初「まずはこの薬とこの薬を混ぜて…。」

「純……」

初「え？」

ボカアアアン！！！！！！」

純「けほつ…。」

初「失敗」。

炎「あー…何でこんなことしなくちゃいけないのかな？…。」

雲雀「いいじゃん！コスプレぐらい！」

炎「でもな〜。…」

涼音「この服がいいな……」

涼「私はこれ。」

「シード、いね！」

スバル「もういいか？じゃ、オープン！」

ぱああああ…。

クルス「ぶはあー!!」

クルスは鼻血を出した。

クルス「こ…これは…3次元と2次元が…一体化した…。」

スバル「分かったクルス。もうそれ以上喋るととんでもないことになる。」

今日も平和です。

日常14（後書き）

日常15に続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8395x/>

狂撃隊の生活日常

2011年11月24日22時58分発行